

中国の諸相を読む  
— 近くて遠い未知の大陸中国



今帰仁診療所

石川 清和

沖縄は古くから中国と交易があり多大な影響を受けてきた。例えば食文化は中国流の豚肉中心の文化である。現在も留学生や労働力として研修生を受け入れ交流が盛んである。一方で中国共産党の情報操作、日本政府の弱腰の外交で私たちは本当の中国の姿が見えていない。日本の鎖国時代から沖縄は中国との交易の窓口となっていた。第2次世界大戦でも沖縄は日本では唯一の地上戦の被災地でもあり、反日の声が強中国でも沖縄への思いは別格の存在のようだ。これからの日中の交易のより近い門戸となるためにも中国の実像を知ることは大切だと思う。また、北京オリンピック観戦に行かれる方は、その前に、是非この2冊の本を読むことをお勧めします。

① 「中国の危険な食品」

周 勃【著】・廖 建龍【訳】草思社出版

中国の醤油は日本の醤油と似て非なるもの!!! 中国では大豆を発酵させて醤油を作る文化はとっくの昔に絶えてしまった。髪の毛を1kg10~15円で回収し、化学薬品でアミノ酸を抽出し、他の化学物質と混ぜ合わせて醤油なるものを作るらしい。中国の妻を持つ友人の

話では、中国の醤油は2~3月で沈殿する、との事。(20年前中国を旅行したときの食事に出てきた醤油が化学物質で作られていたなんて・・・ ショック!)

新しい医食同源：発熱、咳、黄色い痰があると、公園の屋台の魚屋に行き魚屋さんに相談すると、「前は症状が軽かったから淡水魚でテラマイシンが入っているのを食べさせたけど、今回は重症だからこの多宝魚（イシビラメ）を食べるといい。ニトロフラン類、シプロフロキサチン、エリスロマイシン等の抗生剤が入っているからよく効くよ!」

養殖業者は「土地の人間はここで養殖した魚は食わないよ」と皆異口同音に言うとの事。

廃油の再利用：中国13億人の胃袋を賄うのは並大抵のことではない!例えば料理に使う油、絶対に不足するのではと思うのは自分だけだろうか?料理に使う油も再利用される。ホテルなどの大量に消費する施設の排水溝を流れてくる油を回収し分離調整して再利用される。街中の屋台などはこのような油を使うこともある。屋台の揚げ物を食べるときに古い油の味がしたらご用心!!!

2001年のFAO(国連食料農業機関)の統計では中国の豚肉生産は4,240万トンで世界の豚肉生産の46.1%を占めている。豚肉は赤身肉が高く売れるが赤身肉タイプの豚を育てるにはコストがかかりすぎ赤字になるという。しかし、塩酸クレンブテロール(肉赤身化剤)を普通の豚に出荷の10~20日前に投与するだけで赤身肉タイプの豚に速変する。肉赤身化剤は作用の強いベータアドレナリン類似レセプター作



用物質で気管支喘息に使われていた。人間がこれを含む豚肉を食べるとめまい、吐き気、手足の震え、動悸、心臓停止に陥り死亡することもある。1999年から肉赤身化剤による中毒が頻発している。スポーツ選手が食べドーピング違反になったり（オリンピックに選手を送り出す各国が選手の食材を持ち込むことにしたのは当然のことと考えられる）、警察・解放軍の食堂でも中毒が発生し任務ができなかったこともある。著者が2005年肉赤身化剤の調査機関を取材したときに、まともな陰性サンプルを手に入れるのが非常に困難で、農村地域まで出かけ放し飼いの豚を捕まえないと手に入らないといわれたこともある。

その他にも四川泡菜に工業塩を使用し虫の発生を予防するためにDDTを使用したり、貴州では2,642店の飲食店中215店が酸湯魚にリピート客を増やすためケシを入れたり、工業塩や亜硝酸ナトリウムを混ぜた密売塩が出回っているため、国の機関衛生部が塩は正規のルートで買うことと4回目の警告を出したりしている。

その他にも食品をめぐる問題は多々あり、吃驚すると同時に考え込んでしまう。

## ②「中国に人民元はない」

田代秀敏著 文春新書出版

中国は中国であり日本ではない！中国と日本の違いを知らずに日本の常識・通念が中国でも通用すると考え行動すると摩擦が生じ、危険な状態に陥り、物事がうまく運ばない可能性がある。

中国は共産党が最高機関であり、共産党が国家機構の上に君臨し立法・司法・行政全ての国家機関を手取り足取り指導する。ゆえに、中国では裁判所はあるが公平な裁判はないし、地方公務員はなく省・市・県・自治区にいたるまで国家公務員である。どんな僻地の公務員でも業績しだいでは中央の重職に取り立てられることもある。そのために地方政府による投資加熱が生じている。その投資に必要な資本は基本的にただであるため重複投資（同じような投資案件があちこちでも同時に進められ）、重複建設（同じ用途の建物をあちこちでも同時に建設すること）がはびこっている。そうした重複投資と重複建設の帰結として中国のあちこちで作られかけのまま破棄されたビルの残骸が見られるこ

とがある。

中国国民は政府に財産を吸い上げられていると考えている。「公」という字は、二本の指で上から摘み取ることを表している。「公」が自分のものを取り上げるのなら逆に「公」から奪い返すのは道理にかなった事であり不正ではない。だから、中国に公私混同はない。2004年に1～2月に中国人民銀行が農村での建設資金として810億元拠出したが、同じ時期に農村で実際に建設された公的施設はわずか10億元だった。差額は関係した党幹部、党官僚、国家官僚、国家公務員、地方ボスの懐に流れて行ったのである。

中国の農民は農工民として農民戸籍に属し、都市部の労働者（工民）都市戸籍とは厳格に区別される。だから、新たな工業団地造成のために農場を接収され都市部に出稼ぎに出ても都市戸籍を持つことはできない。さらに、農民には年金、医療保険、最低賃金保証もない。

今中国は富裕層と貧民層と二極化が進んでいるといわれる。この二極化にこのような社会構造が大きな影響を与えているのであろうか？

上記の2冊の本を読むことで、苦悩する中国の本当の姿、日本と中国の政治・国民の相互の考え方の違い、日中間の多くの問題の本質が見えてくるのではないだろうか？

さて、これらの本の内容がフィクションかノンフィクションか？中国を旅行される方にとって実際に確かめるチャンスかもしれない。旅行から帰ってきたら是非ご一報いただきたい。この本はフィクションだったとの報告があればうれしいのだが・・・

